

貨幣理論の地位と課題(1)

——マルクスの研究方法の序章——

飯 田 繁

- 一 貨幣の理論的段階
- 二 資本家的社会関係のもとでの貨幣流通……(以上本号)
- 三 貨幣理論の研究課題
- 四 貨幣理論と貨幣政策

一 貨幣の理論的段階

貨幣理論は、マルクス経済学の全理論体系のなかでいったいどの段階・地点に位置し、そしてまたどんな意義・役割をもつのだろうか。この問題は、マルクス貨幣理論研究のまっさきにとりあげられ・解明されなければならないところのものである。というのは、この問題の解明が、商品(形態)の歴史性・社会性から資本(形態)の歴史性・社会性への現実的・論理的展開・上向の過程を探知するひとつの中間項的必須条件なのだからでもある。ところが、貨幣理論は、資本理論の成立を媒介することによって、資本理論へ自己解消するのではなく、むしろこうして新たに生成することになる資本理論のなかにそのままおながく生きながらえる。そこで、貨幣理論と資本理論とがマルクス経済学全体体系のなかでしめるそれぞれの位置づけにかんしてひとつの迷いさえ生じかねないことにもなる。

貨幣という特定概念は、もともとマルクス経済学体系では理論の最基底・抽象的段階の一環——商品理論につづく理論段階の一環ともいえるし、また商品理論のなかでの一定発展段階の理論的一環ともいえるところの——をなすものとして把

2 貨幣理論の地位と課題(1)

握されうるし・またなければならぬ。労働生産物が商品形態に転化する歴史的に特殊な社会関係、すなわち、自然発生的な社会的分業と生産手段の私的所有とがあいならんでおこなわれる一定の歴史的な社会関係、のもとではじめて社会的に選出・排除された特定の一商品（それは、最終的には金・銀→金に定着する）こそがまさしく一般的等価形態としての貨幣なのである。こうして、貨幣の理論はまず単純商品の理論のうえにたつことになる。

ところが、貨幣の理論が資本の理論へ上向・展開するということは、単純商品の理論が成立するということや、単純商品の理論が貨幣の理論へ上向・進展するということとは大きくちがひ、新たな他の歴史的・社会的諸関係・諸条件によって規定されなければならなかつた。貨幣の資本への転化を規定した、その新たな他の歴史的・社会的諸関係・諸条件というのは、一方では貨幣財産の一定量（量より質への転化、が可能となる程度⁽¹⁾の一定量）集積、他方では労働力の「商品」化（単純商品の独立生産者からの生産手段の収奪）——いわゆる資本の本源的蓄積、——にほかならない。

注 (1) 「貨幣または商品の所有者は、生産のために前貸される最低限量が中世的最大限量をずっとこえるようになるときに、はじめてじっさいに資本家に転化する。たんなる量的変化がある一定点で質的差異に急転する、という、ヘーゲルによってかれの論理学のなかで発見された法則の正しさが、ここでも、自然科学でとおなじように立証される」(Das Kapital, Bd. I, S. 323. [傍点—原著者])。飯田繁『利子つき資本』137-141ページ(有斐閣版)。

貨幣概念は、このように、ほんらい商品概念に後続し、資本概念に先行する。貨幣の資本への転化→資本流通（表式 $G-W-G'$ ）に先だつ単純商品流通（表式 $W-G-W$ ）のなかでは、貨幣はただ、たんなる貨幣・単純な貨幣 (bloßes Geld) として、貨幣の諸機能をはたすだけだ。これにたいして、貨幣が資本に形態転化・転形すると、貨幣は、全運動視点的に考察されるばあい、もはやそれじたい「たんなる貨幣」=「貨幣としての貨幣」(Geld als Geld)⁽²⁾ではなく、貨幣資本、(Geldkapital) =「資本としての貨幣」(Geld als Kapital)⁽³⁾として資本流通（表式 $G-W-G'$ ）の起点から終点への自己増殖過程

をたえず循環運動するものとなる。ところが、表式 $W-G-W$ における「たんなる貨幣」も、表式 $G-W-G'$ における「貨幣資本」も、表式記号のなかではまったくおなじ略字 G で表現されている。もっとも、「貨幣資本」は、表式 $G-W-G'$ にみられるように、たんに G としてだけではなく、 G' ($G+4G$) をともなうものとして表現されることによって、そのような G' をともなわない表式 $W-G-W$ の G (「たんなる貨幣」) と区別されることが一見してあきらかなのではあるが。そうはいつでも、こうした両表式におけるそれぞれの G のちがいは、歴史的・社会的諸関係をまったく異にする両表式じたいの内容分析によってはじめて認識されうることがらである。

注 (2)(3) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 153. ここでいう「貨幣としての貨幣」は、「資本としての貨幣」と対立するのであって、「価値尺度・流通手段としての貨幣」から区別される「貨幣」(蓄蔵貨幣・支払手段・世界貨幣を内包する「貨幣」Vgl. a. a. O., SS. 135-152. これもつうれい「貨幣としての貨幣」とよばれる)とはちがう。「資本としての貨幣」と対置される「貨幣としての貨幣」は、表式 $G-W-G'$ の $G \cdot G'$ と対立する表式 $W-G-W$ の G であって、うえの「貨幣」だけではなく、「価値尺度・流通手段としての貨幣」をも全面的にふくむのだからである。なお、飯田繁「貨幣流通と物価運動との関係(=)」(『経済学雑誌』第54巻第5号、昭和41年5月、58ページ参照)。三宅義夫「貨幣としての貨幣」(『資本論辞典』〔青木書店版〕69-71ページ参照)。

両表式の G がおのおの区別されるのは、両表式の総過程のなかでそれぞれの G がもつ形態規定と運動規定においてである。けれども、表式 $G-W-G'$ ($G-W \leftarrow \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'-G'$) の生産過程の前後によこたわる流過程 ($G-W$; $W'-G'$) にかんするかぎりでは、 G は資本形態にありながら、しかもけっして資本としては機能しないで、ただ「たんなる貨幣」として機能する⁽⁴⁾。ちょうど、 W' が剰余価値をそれじたいふくむ商品資本の形態にありながら、しかもけっして資本としては機能しないで、ただ「たんなる商品」として機能するのとおなじように。貨幣が、資本に転化され、表式 $G-W-G'$ のなかに「貨幣資本」として包摂されるようになって、⁽⁴⁾「げんじつの流過程、(商品〔資本家的商品〕の流過程)のなかでは、このように「貨幣資本」が

4 貨幣理論の地位と課題(1)

「たんなる貨幣、として機能するというは、資本理論のなかでの貨幣理論の存立をしめすものである。こうして、貨幣理論のマルクス経済学全体系における理論段階的位置づけ・意義づけ、さらには、資本理論のなかでの貨幣理論の位置づけ・意義づけ、あるいは資本理論と貨幣理論とのあいだの理論段階的關係が新たな問題としてあらわれることになる。

注(4) 「……貨幣状態にある資本価値はただ貨幣諸機能をはたすだけで、その他の機能をなにもはたさない。これらの貨幣諸機能を資本諸機能にするものは、資本の運動におけるそれらの貨幣機能の一定の役割であり、したがってまた、貨幣諸機能があらわれる段階と資本循環の他の諸段階との関係である」(Das Kapital, Bd. II., S. 26.)。「……資本が支出されると、資本は、資本として第三者に支出されるのではなく、たんなる商品として第三者に販売されるか、たんなる貨幣として商品ととりかえるために第三者にひきわたされる。資本は、資本の流通過程のなかでは、けっして資本としてではなく、ただ商品として、あるいは貨幣としてあらわれるのであり、この商品または貨幣こそこのばあい他者にとつての資本の唯一の定在なのである」(a. a. O., Bd. III., SS, 375-6. [傍点-原著者])。「げんじつの流通過程のなかでは、資本はいつもただ商品または貨幣としてしかあらわれず、資本の運動は一連の購買と販売に帰着する」(a. a. O., Bd. III., S. 377.)。飯田繁『利子つき資本の理論』54-62ページ参照。

問題の解決は、貨幣そのものの本質規定・形態規定の解明によってあたえられなければならない。では、貨幣そのものの本質規定は？ それは価値形態のなかにある。貨幣が貨幣であるのは、貨幣が、価値そのものだからではなく、価値の形態だからである。そこで、貨幣理論のマルクス経済学全体系における理論段階的位置づけ・意義づけを解明し・決定するものは、ほかならぬ価値形態論の展開である。価値形態I(かんたんな価値形態)における等式右辺・等価形態のなかに、はや貨幣の萌芽・ナズがひそむ⁽⁵⁾とはいっても、一般的等価形態としての貨幣(金あるいは銀)は、価値形態の最終的な展開＝価値形態IV(貨幣形態)において論理的・現実的にはじめて出現・定着する。

注(5) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 53. S. 76. 「〈資本論〉における価値形態論の目的は、商品の価格すなわち貨幣形態の謎を、そしてそれと同時にまた貨幣の謎を解くことにある。……これらの謎は、従来何びとによっても解かれなかったの

みでなく、謎であることさえ本当には理解されなかったのであるが、マルクスはこれを〈資本論〉において価値形態の問題として設定することによって、はじめて徹底的に解明したのである。すなわち彼は、何よりもまず、貨幣形態は発展した価値形態であり、貨幣形態の謎は価値形態の基本的な謎の発展したものにはかならないことを看取したのである。そこで彼は、貨幣形態を遡及分析してその原基の形態——簡単な価値形態——に還元し、そこに貨幣形態および貨幣の謎の核心を発見したのである」(久留間敏造『価値形態論と交換過程論』4-5ページ)。

こうして貨幣は、じぶんとは区別された他のあらゆる諸商品の価値を、一般的・統一的に表現することに役だつそれじしんの使用価値量(物質量)=材料にほかならない、すなわち一般的等価形態にある、特定の一商品(金あるいは銀、近代→現代的にはもっぱら金)である、ということが確認される。貨幣もまた、しょせんはひとつの商品だったのだ。けれども、貨幣がひとつの商品であることをたんに洗いだすだけでは、貨幣の本質規定・価値形態性はけっして解明されえない。貨幣は、一般的等価形態として、他のあらゆるふつうの諸商品から社会的に区別・排除されたところの、したがってまた他のあらゆる個々の諸商品とむしろあい対立するところの、特定の一商品なのだから。それで、貨幣理論は、商品理論の基礎のうえにたちながらも、商品理論の展開として商品理論そのものから区別されなければならないわけだ。ところで、貨幣理論が商品理論そのものにもまさる把握のむずかしさを内蔵している、といわれるのはなぜか。「……どのようにして、なぜ、なんによって(wie, warum, wodurch)商品が貨幣である」⁽⁶⁾のかを把握することこそが、商品理論そのものにはみられない貨幣理論の固有・困難な問題点なのだからである。そうはいっても、貨幣が商品であることを無視したり・軽視したりしてよい、というのではけっしてない。貨幣は、それじたい使用価値と価値との矛盾の統一物であるひとつの商品だ(名目的・票券的なものではない)からこそ、価値的視点においてじぶんが等置される他のあらゆる諸商品の価値を、じぶんの使用価値・商品体——価値のうえで他の諸商品と等置される社会関係・交換関係のもとでは、価値の現象形態となる使用価値⁽⁶⁾——で一般的・統一的に

6 貨幣理論の地位と課題(1)

表現することに役だちうるのだ。しかし、貨幣が、たんにひとつの商品であることを、いしかえれば、使用価値であるとともに価値でもあるということを知っただけでは、このような、価値形態が形成・展開される論理と現実とはとうてい把握されえようはずがない。すなわち、貨幣理論が商品理論にそっくりおきかえられるだけでは、貨幣理論の核心はまったくつかめないことになる。

注 (6) Das Kapital, Bd. I., S. 98. この問題の解明にかんするひとつの提案・久留間敏造『価値形態論と交換過程論』20-1 ページ, 39-42 ページ参照。

(7) 「貨幣は象徴 (Symbol) ではない。ちょうど、商品としての使用価値の存在が象徴ではないのとおなじように」(Zur Kritik, S. 36.)。

(8) Vgl. Das Kapital, Bd. I., SS. 61-4.

貨幣理論は商品理論のうえにたち、資本理論は貨幣理論のうえにたつ。いしかえれば、商品理論は貨幣理論の基盤として、そしてまた貨幣理論は資本理論の基礎として、それぞれ存立している。こうして、貨幣理論は商品理論から資本理論への展開・上向過程を媒介するひとつの中間項の地位と意義をもつのであった。ところで、⁽⁹⁾金(銀)は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金でなければならない⁽⁹⁾、というマルクスの命題は、まさに、この、商品理論のうえにたつ貨幣理論の位置づけを明示している。原鉱石から精製された労働生産物・使用価値としての金は、ほんらい人類生活史における過去・現在・未来をつうじてみられる超歴史的・自然的な存在物である。このような超歴史的・自然的属性をもつ労働生産物・金は、いつどんな歴史的時代においても「貨幣である」(メタリストの見解)、のではない。労働生産物が商品形態をとる、したがって労働生産物・金もまた商品形態をとる、歴史的に特殊な社会関係のもとではじめて、金は貨幣商品・貨幣となる。つまり、いつの歴史的時代にも見られる「超歴史的な自然物」・金が「歴史的な社会物」・貨幣になるのは、特定の歴史的な社会関係＝商品社会関係のもとでだけである。

注 (9) Vgl. Zur Kritik, S. 151. Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 95. 飯田繁『マルクス紙幣理論の体系』32-44 ページ, 281-6 ページ参照。

商品がなければ貨幣もありえない。というのは、価値がなければ価値形態もありえないのだからである。金が、商品となるというだけではなく、さらにすすんで貨幣となるという現実と論理が理解されなければならない。ところで、商品理論から貨幣理論への展開、貨幣の理論的段階を正しくつかむためには、商品・貨幣の本質規定にふかくひそむ特殊歴史性・特殊社会性、すなわち商品の物神性・貨幣の物神性——抽象的・人間的労働の価値化、価値の価値形態化、一般的にいえば、労働をめぐる人と人との社会関係の物神化・物象化・物化・事物化⁽¹⁰⁾——を抽象的な段階から具体的な段階への展開過程に即して一步一步と逐次的に正しくたどりすすむのでなければならない。貨幣の理論的段階を追究しようとしているいま、わたくしがマルクスのうえの命題を問題としてとりあげたのは、その命題のなかに奥深くひそむ密度の高い内容を掘り出すことによって、貨幣理論が、商品理論を基礎・前提とするのでなければ、しかも商品理論の展開としてでなければ、とうてい正しく把握されえないものであることを基本的に学びとれるひとつの契機ともなるうか、とおもえたからであった。その命題の前半部分（「金は必ずしも貨幣ではない」）では、ほんらい超歴史的な自然物の金と、ほんらい歴史的な社会物の貨幣とのあいだの経済学的に重要な関係が、そしてまたその命題の後半部分（「貨幣は必ず金でなければならない」）では、経済学上不可知論的な金の自然的属性——耐久性・等質性（分割・融合性）・貴重性（小量物質内に大量労働がふくまれている、したがって携行容易性）など⁽¹¹⁾——に偶然むすびつく価値形態の展開事情、すなわち、金による一般的等価形態の終局的・定着的占有＝価値形態Ⅳの成立事情が、それぞれ意味ぶかく暗示されている。

注 (10) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 78.

(11) Vgl. Zur Kritik, SS. 149-150. Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 95. 『経済学雑誌』第54巻第3号, 22ページ参照。

さて、うえにみたように、貨幣が資本に転化したのちにも、なお貨幣は、表式 $G-W-G'$ における「げんじつの流通過程」のなかでは資本としてで

はなく、貨幣として生きのびる。方式 $G-W-G'$ のなかでの G が方式 $W-G-W$ のなかでの G と区別されるのは、運動の総過程（生産過程と流通過程の総括）においてであって——前者の G は価値増殖して出発点に還流するのに、後者の G は価値増殖せずに出発点からますます遠ざかる——、 \dot{G} げんじつの流通過程、そのもののなかではない。表式 $G-W-G'$ における \dot{G} げんじつの流通過程、のなかでは、あとでみるように、 $G \cdot G'$ （金貨・信用貨幣のばあい）はあくまでも貨幣流通の諸法則に支配されて運動するのであり、その点だけについてみれば、表式 $W-G-W$ における G が貨幣流通の諸法則に支配されて運動するのとかわりはない。だとすると、資本流通表式のなかにはいりこんだ貨幣流通の理論的段階、いかえると、資本理論のなかでの貨幣理論の地位はどのようにとらえられるべきなのか。

この問題の解決は、貨幣の本質規定・形態規定と資本の本質規定・形態規定とのちがいがあきらかにされることによってあたえられる。貨幣の本質は、さきにもたように、価値形態IV（貨幣形態）のもとでの一般的等価形態として規定される。貨幣が資本に転化されることによって表式 $G-W-G'$ のなかに包摂されることになっても、 $G \cdot G'$ が諸商品・商品資本 ($W \cdot W'$) の一般的等価形態であることになんのちがいもない。そのさいの $G \cdot G'$ が貨幣としての貨幣、ではなく、 \dot{G} 資本としての貨幣、であるのは、 $G \cdot G'$ がもはや $W \cdot W'$ （相対的価値形態にある）の諸価値を一般的に表現する形態（価値形態IV＝貨幣形態のもとでの一般的等価形態）ではなくなったからではなくて、単純商品流通関係の革命的・否定的発展として新たにきり開かれた対立的社会関係・資本流通関係の総過程的視点のもとでの価値増殖運動をになう始発要因＝ \dot{G} 資本の貨幣形態、となっているのだからである。貨幣概念はもともと資本概念に先行するのだけれども、貨幣概念がこのように資本概念の成立後にもなおながく生きのびるのであるからには、貨幣概念が資本概念に先行するという現実と論理は、貨幣概念が資本概念と併存するという現実と論理を否定するものではない。しかし、だからといって、貨幣概念が資本概念と

併存するという現実と論理が貨幣概念の本質規定それじたいをすこしも変えるものではないでしょう、資本概念にたいする貨幣概念の現実的・論理的先行性はそのまま存続する。そこで、資本理論のなかでの貨幣理論のこうした存立は、資本理論の基礎・前提としての貨幣理論そのものの理論的段階・位置づけに変更を加えるものではけっしてない。

注 (2) 「……資本家的な社会関係のもとでも、貨幣 ($G \cdot G'$ [両者とも、資本としての貨幣=貨幣資本]—追記) は、げんじつの流通過程、のなかでは、あくまでも貨幣・一般的等価形態としての本質をうしなっていない……」(『経済学雑誌』第54巻第3号, 24ページ [傍点—原文のまま])。

二 資本家的社会関係のもとでの貨幣流通

われわれは、貨幣理論を研究するばあい、まず、現実的にも論理的にも資本家的社会関係に先行する単純商品社会関係における貨幣理論の究明からはじめる。けれども、それを究明するのは、たんに過去の歴史的・論理をそのものとして知るためにはではない。そうではなくて、むしろそれをとおして資本家的社会関係におけるげんに生きている貨幣理論を正しく理解するためである。資本理論に先行する貨幣理論が、資本理論の一定領域(げんじつの流通過程、の理論)のなかではそのまま基本的に妥当するのだから。ところで、資本理論のなかでのそうした貨幣理論を追究するさいに、まず問題となるのは、うえにみたつぎの点だ、

貨幣が、資本に転化しても表式 $G-W-G'$ の「げんじつの流通過程、($G-W; W-G'$)」のなかでは、資本としては機能しないで、あくまでも貨幣として機能するのはなぜなのか。「げんじつの流通過程、のなかでは、 $G-W$ においても、 $W-G'$ においても、 $G \cdot G'$ は、 $W \cdot W'$ の一般的等価形態にほかならず、 $W \cdot W'$ の価値を観念的・量的(価形形態)に転化・表現し、そしてこれを本来的にはそのまま現実的・量的に実現するだけのものであって、けっしてそれじたい価値増殖しないのだからである。 G が価値増殖して G' とな

るのは、 $G \cdot G'$ が $W \cdot W'$ の一般的等価形態として「げんじつの流通過程」のなかで機能することによってではなくて、 G の $W < \overset{A}{P}_m$ への転形を契機・媒介とする生産過程における現実の剰余価値生産 ($W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$) によってである。生産過程に先行する第一の「げんじつの流通過程」($G - W$) は W の価値増殖 ($W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$) を導入するだけのものであり、また生産過程に後続する第二の「げんじつの流通過程」($W' - G'$) は価値増殖をとげた W' ($W + \Delta W$) を貨幣形態 G' ($G + \Delta G$) に実現・再転化するだけのものである。そうはいっても、前後の「げんじつの流通過程」は生産過程にとってはぜったいに不可欠のものであって、たえまないそうした導入・実現の過程＝「げんじつの流通過程」なしには生産過程ははじまらないし、またくりかえされない。「貨幣は商品(このばあい、労働力と生産手段)に転化されなければ、資本にはなれない」⁽¹⁾、「流通過程なしには価値は増殖しないし、流通過程のなかでは価値は増殖しない」⁽²⁾。

注 (1) 「貨幣は商品形態をとることなしには、資本にはならない」(Das Kapital, Bd. I., S. 162. [傍点—原著者])。飯田繁『利子つき資本』(有斐閣版) 137-9 ページ参照。

(2) 「……資本は、流通からは生じえないし、また流通から生じえないものでもない。資本は流通で生ぜねばならないと同時にまた流通で生じてもならない。……まだ資本家の幼蟲としてしか現存しないわが貨幣所有者は、諸商品とその価値どおりを買ってその価値どおりで売り、しかも過程の終局ではかれが投入した以上の価値をひきださねばならない。蝶へのかれの成長は、流通部面のなかでおこなわれなければならないし、また流通部面のなかでおこなわれてはならない。これが問題の諸条件だ。ここがロードス島だ、ここで跳べ！(Hic Rhodus, hic salta! [Hier ist Rhodus, hier springe!])」(a. a. O., Bd. I., SS. 173-4. [傍点—原著者])。「…… G と W との交換過程は、価値増殖過程をみちぎり入れはしても、それじたいはけっして価値増殖過程なのではなく、また W' ($W + w$) と G' ($G + g$) との交換過程は、生産過程で増殖された価値を実現しはしても、それじしんはだんじて価値増殖過程なのではない。掠奪的な・前期的な商業資本の流通過程・即・価値増殖過程とはちがって」(『経済学雑誌』第 54 卷第 3 号, 24 ページ [傍点—原文のまま])。

表式 $G-W-G'$ の $G \cdot G'$ が、その「げんじつの流過程」のなかでは、資本としてではなく貨幣として機能する——したがって、「げんじつの流過程」のなかだけについてみれば、表式 $G-W-G'$ の $G \cdot G'$ は表式 $W-G-W$ の G とおなじ流通法則に支配されて運動する——という事実がとくに留意・認識されなければならない。そしてまた、こんなにもくりかえし強調されなければならないわけは、こうした大事な事実がまったく意外にも学界の一隅で見おとされているのではなからうかと案ぜられるからである。 $G \cdot G'$ が、表式 $G-W-G'$ の「げんじつの流過程」のなかでは貨幣として機能するということが、おなじ $G \cdot G'$ が、表式 $G-W-G'$ の生産過程をふくむ総過程視点において⁽³⁾は資本として機能するということが対照的に区別される(『資本論』第1巻・第2巻の理論的段階)。対照的な区別がなされるのは、しかし、たんにそれだけではない。表式 $G-W-G'$ の $G \cdot G'$ がその「げんじつの流過程」のなかでは貨幣として機能するということが対照的に区別されるのは、もうひとつ、表式 $G-G-W-G'-G'$ における資本の現実的過程 $G-W-G'$ を導入し・補足する前後過程 $(G-[G-W-G']-G'; G-[...] -G'; \text{短縮された表式 } G-G')$ の $G \cdot G'$ が資本として機能する——たんに譲渡されるだけで価値増殖・自己増殖する(G の、「資本としての譲渡」=「資本としての商品・化」=「ひとつの独特な商品・化、 G が利子つき資本として運動する」)⁽⁴⁾——ということとである(『資本論』第3巻第5篇「利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子つき資本」の理論的段階)。そこで、このさいには、まえの $G \cdot G'$ とあとの $G \cdot G'$ とがたとえともにおなじく貨幣資本とよばれようとも、まえのは「流通資本としての貨幣資本」、あとののは「利子つき資本としての貨幣資本」なのであって、それぞれまったくちがう機能・運動をおこなうものである、ということが⁽⁵⁾とくに注意されなければならない。

注 (3) G (金・兌換銀行券のばあい) が、たんなる貨幣として機能し、貨幣流通の諸法則に支配されて運動するのは、ただ表式 $W-G-W$ (単純商品流通)のもとでだけだ、いいかえれば、表式 $G-W-G'$ のもとでは、 $G \cdot G'$ はもはや貨幣の流通諸法則には支配されないのだ、というように誤信しているらしいひとつの事

例。「資本に必要な貨幣と流通（商品流通—飯田）に必要な貨幣とが、概念上のみならず、現実にも一致しない可能性が生れてくる」（川合一郎『資本と信用』108ページ）。川合教授は、表式 $G-W-G'$ （「 $W-G$ にもとづかない $G-W$ が次々に行われる」〔同書100ページ〕ばあい）においては、表式 $W-G-W$ （ $W-G$ にもとづく $G-W$ ）のもとの貨幣流通の諸法則とは「概念上のみならず、現実にも一致しない可能性」——つまり、「通貨」（「流通に必要な貨幣」）とは区別される「資金」（資本に必要な貨幣）のゝ運動法則、(?)——が成立するものと考えられた。こうして、教授は資本家的社会関係のもとの $G \cdot G'$ のゝ資本性、を強調することによって、表式 $G-W-G'$ のゝげんじつの流通過程、のなかでの $G \cdot G'$ のゝ通貨性、（貨幣流通の諸法則の支配）を否定された。川合一郎『信用制度とインフレーション』65-94ページ参照。飯田繁『インフレーションの理論』138-142ページ参照。飯田繁『現代銀行券の基礎理論』282-346ページ参照。飯田繁「貨幣流通と物価運動との関係(-)」(『経済学雑誌』第54巻第3号, 昭和41年3月) 24-6 ページ参照。

なお、発想法のうえでは右とまったくちがうが、貨幣論段階を単純商品流通論段階と素朴に同一視する他のひとつの事例。「……教授（飯田）の貨幣論段階的な考え方、その単純商品流通視角……」（岡橋保『信用貨幣の研究』252ページ）。こうして、岡橋教授もまた結果論的には、資本家的社会関係のもとの貨幣流通、にたいする無理解——銀行券が、げんじつの流通過程、（流通資本の運動過程・商品流通過程）のなかにあるばあいと、独特な流通過程、（利子つき資本の運動過程・銀行信用過程）のなかにあるばあいとの、それじたいの本質規定・運動規定における差別性にたいする無頓着——のほどを暴露された。

- (4) 「……貨幣資本は貨幣資本としては、じっさいには、ただたんに貨幣として、すなわち、商品(生産諸要素)の購買手段として作用するだけだ。この貨幣が、このばあい同時に貨幣資本であり、資本の一形態であるのは、購買の行為からではなく、貨幣資本がこのばあい貨幣としておこなう現実的な機能からではなくて、この行為と資本の総運動との関係から生ずるのだ。貨幣資本が貨幣としておこなうこの行為は資本家的な生産過程を導入するのだから」(Das Kapital, Bd. III., S. 375.)。
- (5) Vgl. a. a. O., Bd. III., SS. 380-383. 『利子つき資本の理論』64-8 ページ参照。
- (6) Vgl. Das Kapital, Bd. III., SS. 380-389. 「A（貸手—飯田）はかれの貨幣を貨幣としてではなく、資本として手ばなす。……Aにとっては、貨幣は、それをBにただ手ばなすだけで資本となった」(a. a. O., Bd. III., S. 381.)。「貸手は貨幣を資本として貸付けるのであって、そうしたものとして貨幣は資本諸機能……」

をはたさなければならぬ」(a. a. O., Bd. III., S. 383.)。「貸手はかれの貨幣を資本として支出する。かれがある他のひとに譲渡する価値額は資本であり、したがってかれの手もとに還流する」(a. a. O., Bd. III., S. 383.)。「借手は、貨幣を資本として、自己増殖する価値として借りる」(a. a. O., Bd. III., S. 386.)。『利子つき資本の理論』43-68ページ参照。『利子つき資本』13-26ページ、333-398ページ、399-420ページ参照。

- (7) 『利子つき資本の理論』30-34ページ参照。『利子つき資本』1-3ページ、13-26ページ参照。ヒルファディングは両者を混同した。Vgl. Hilferding, R., Das Finanzkapital, SS. 72-122. Mit einem Vorwort von F. Oelßner, Dietz Verl. Berlin. 1955. 飯田繁「ヒルファディングの信用理論」(『講座信用理論体系』IV学説篇) 266-270ページ参照。同「貨幣資本と利子つき資本——ヒルファディングの〈資本信用〉論にたいする一批判——」(『バンキング』第107号, 昭和32年2月)参照。デ・ローゼンベルグ・淡徳三郎訳『資本論註解』第4巻442ページ参照。トラハテンベルグ・川崎己三郎訳『現代の信用及び信用組織』221ページ参照。

げんじつの流過程、のなかでたんなる貨幣として機能する「流通資本としての貨幣資本、 $G \cdot G'$ 」は、このように一面では、それじたい(すなわち、無媒介的・最高物神的に)資本として機能する「利子つき資本としての貨幣資本、 $G \cdot G'$ 」からも、そしてまた他面では、げんじつに資本として機能する総過程視点の「流通資本としての貨幣資本、 $G \cdot G'$ 」からも、それぞれ対照的に区別される。こうした両面的な差別性のうえにたつところの、表式 $G-W-G'$ の「げんじつの流過程、のなかで機能するかぎりの「流通資本としての貨幣資本、 $G \cdot G'$ 」が、むしろ表式 $W-G-W$ のたんなる貨幣 G との同一性をもつ、といううえのような立論にたいして、ある種の疑念を一部の人びとはいだくのであろう。うえの注記にみたような、たとえば、 $W-G$ に先だって $G-W$ がおこなわれることになる、 G はもはやたんなる貨幣として機能するのではなく、といったある種の疑念が。なるほど、表式 $W-G-W$ の循環中間項 G と、表式 $G-W-G'$ の循環始点・終点 $G \cdot G'$ ——終点 G' への復帰、むしろ再始発点——とは、形態規定においても、運動規定においても、総過程視点的にはけっして同一視されてはならない。だが、表式 $W-G-W$ の G が

「貨幣としての貨幣、として、また表式 $G-W-G'$ の $G \cdot G'$ が「資本としての貨幣、として、それぞれ本質規定され・運動規定されることになるのは、転形序列がたんに逆転されたからなのではない。「商品転形の順序が転倒し、第一転形にさきだつて第二転形がはじまるということじたいは、……社会関係の質的な転換をいみしない」。⁽⁹⁾「……購買が販売に先行し、単純な商品流通の転形順序が逆転されることによって、貨幣は資本に転化、単純商品的な社会関係は資本家的な社会関係に変転する、などとかんたんに考えてはならない」。⁽¹⁰⁾表式 $G-W-G'$ の $G \cdot G'$ が、貨幣資本として——たんなる貨幣として、ではなく——資本運動の出発点・終結点にたち、そうすることによって、総過程視点においてはもはやたんなる貨幣として支出され・運動するもの（還流しないもの）ではなく、資本として前貸され・還流するものである、ということは、表式 $G-W-G'$ ($G-W; W'-G'$) の第一転形 ($G-W$) がたんなる購買行為であり、そしてまたその第二転形 ($W'-G'$) がたんなる販売行為であることをけって否定するものではない。そこにみられる購買行為・販売行為は、表式 $W-G-W$ の購買行為・販売行為から「質的に区別されなければならないものをなにひとつふくんでいない」。⁽¹¹⁾

注 (8) 表式 $W-G-W$ ($W_1-G; G-W_2$) においては、購買に先だつ販売、購買のための販売、使用価値変換を最終目的とする価値循環、 G (貨幣としての貨幣) の終局的支出・非還流がおこなわれるのにたいして、表式 $G-W-G'$ ($G-W; W'-G'$) においては、販売に先だつ購買、販売のための購買、価値増殖を窮極目的とする価値循環、 G (資本としての貨幣) の前貸・還流がおこなわれる。
Vgl. Das Kapital, Bd. I., SS. 155-9.

(9) 飯田繁「貨幣流通と物価運動との関係(四)」(『経済学雑誌』第55巻第5号、昭和41年11月、53ページ)。「われわれは、順序を転倒したところで、単純な商品流通の領域をこえることにはならない」(Das Kapital, Bd. I., S. 164. [傍点—原著者])。

(10) 『経済学雑誌』第55巻第5号、54ページ。「資本は、頭から足指まで毛あなという毛あなから血と汚物をたらしつつ、この世にあらわれる」(Das Kapital, Bd. I., S. 801. [傍点—原著者])。つまり、 G が、表式 $W-G-W$ からぬけて、表式 $G-W-G'$ のなかにはいりこむ(貨幣が資本に転化する)のには、資本の

本源的蓄積過程をへなければ——「血と汚物」を頭をあなければ——ならなかった。

ところで参考までに、 W-G につづく G-W から W-G に先行する G-W への逆転を、 G の貨幣（ 通貨 ）規定から資本（ 資金 ）規定への転化契機として意義づけようとする試みの一事例をみよう。「……資本は G-W-G ' というように貨幣形態に復帰することをその形態の本質とし、 W-G-W の単純な商品流通のなかにおいて、商品社会的には前提である W-G を予想しつつ、商品社会的には結果である G-W をさきに顛倒した順序で行う、すなわち、まだ存在していない将来の貨幣を予想して現在の購買を行うこと（単純な商品流通のもとの、貨幣の支払手段機能—商業信用においてもみられる一飯田）、を形態的な本質とするものだからである。このことによって銀行券（信用貨幣—飯田）は資本の必要によって出され、資本の必要がおわったら、還流によって消滅することになるのである。すなわち、資本にとって G は商品流通にはまだ必要でないときに必要なのであり、商品流通に必要なときにはもう不必要となって返済されるのである。問題は、資本の必要ということは商品流通に必要なということとは違うことである」（川合一郎『資本と信用』107ページ（傍点—原文のまま））。「…… W-G を予想して前以て G-W を行おうという資本自身の形態的な本質から、銀行券（兌換銀行券—飯田）は流通必要量以上に（!?—飯田）投入されざるをえない」（同書112ページ）。こうして、 販売 に先行すを購買、という通流順序の転倒そのものから、価値増殖（ G-G '）が説かれているようだ。「…… W-G にもとづかない G-W が次々に行われて需要は供給を超過し物価は騰貴してゆく」（同書100ページ）。ところが、マルクスはいう。「……剰余価値は名目的な価格つりあげから生ずるのだ、商品をととも高く（zu teuer. 価値以上に—飯田）売る販売者の特権から生ずるのだ、という幻想の徹底的な擁護者たちは、売らないで買うだけの、したがってまた、生産しないで消費するだけの、一階級を想定する。こうした一階級の存在は……単純流通の立場からはまだ解明されえない。……これは致富の、剰余価値形成の方法ではない」（Das Kapital, Bd. I., SS, 169-170. [傍点—原著者]）。

- (11) 『経済学雑誌』第55巻第5号、55ページ。表式 G-W-G ' ($\text{G-W} < \overset{\text{A}}{\text{P}_m} \dots \text{P} \dots \text{W}'-\text{G}$ ')の第一転形（資本循環過程の第一段階 $\text{G-W} < \overset{\text{A}}{\text{P}_m} [\text{G-A}, \text{G-P}_m]$ ）についていえば、「 G から P_m への転形が貨幣から商品（生産資本化される諸生産手段）への転形・売買関係・貨幣関係であるだけではなく、 G から A （生産資本化される労働力〔商品〕）への転形でさえも、じつは、たんなる売買関係・貨幣関係である」（『経済学雑誌』第55巻第5号、56ページ）。「…… G-A という事象においては、貨幣所有者（資本家—飯田）と労働力所有者（賃銀労働者—飯田）

とは、たんに購買者と販売者としてたがいにくまひ、貨幣所有者と商品所有者としてたがいに対立するのにすぎず、したがって、このがわからみると、たがいにたんなる貨幣関係にある……。……この関係は売買であり、貨幣関係である……」(Das Kapital, Bd. II., S. 29.)。「生産資本が商品資本に転形すると ($W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ —飯田) すぐさま、商品資本は、市場に投げられねばならず、商品として販売されねばならぬ ($W'—G'$ —飯田)。市場では、商品資本は単純に商品として機能する。資本家は市場では、ただ商品の販売者としてあらわれる。ちょうど、購買者(購買者である資本家—飯田)が商品の購買者としてあらわれるのとおなじように。生産物は、商品として流通過程で売られることによって自己の価値を実現しなければならず、自己の転化された貨幣としての姿態をとらねばならぬ。だから、この商品が、消費者によって生活資料として買われるか、それとも資本家によって生産手段として、資本の構成部分として買われるか ($G—P_m$ —飯田)、ということもまったくどうだっていい。流通行為では、商品資本は資本としてではなく商品としてだけ機能する」(a. a. O., Bd. III., S. 374.)。

商品と貨幣(あるいは紙幣)との流通関係(商品価格の形成・実現事情)を支配する貨幣流通の諸法則や紙幣流通の独自の一法則は、だから、たんに単純商品流通方式のもとだけのものではない。それらは、資本流通様式のもとでも、⁽¹²⁾「げんじつの流通過程」のなかでは基本的になにも変更されずに存続する。マルクスが、貨幣流通の諸法則や紙幣流通の独自の一法則を単純商品流通方式のもとで精密に解明したのは、けっしてそれらの法則を単純商品流通方式に固有なものとみなしたからなのではなかった。そうではなくて、それらの貨幣流通・紙幣流通をめぐる法則的諸事態が、資本流通様式のもとでも基本的にはそのまま貫徹するからであったし、むしろ資本流通様式における貨幣・紙幣流通関係の原型を単純商品流通方式のもとにみいだしたからでもあった。

注 (12) 「商品流通(第1巻第3章「144ページ以降」)のさいの流通貨幣の数量にかんしてうちたてられたすべての法則は、生産過程の資本家的な性格によってけっして変更されない」(Das Kapital, Bd. II., S. 332.)。単純商品流通様式のもとでは現実的にも理論的にもげんみつな意味ではまだあらわれない信用貨幣(本来的な信用貨幣としての兌換銀行券)においても、いいかえれば、資本主義的代用貨幣においても、単純商品流通様式のもとでの貨幣流通の諸法則がそのまま支配す

る。「おなじ法則（貨幣流通を規定する法則—飯田）は銀行券（兌換銀行券—飯田）の流通でも支配する」（a. a. O., Bd. III., S. 567.）。『現代銀行券の基礎理論』54—63ページ参照。飯田繁「代用貨幣の流通と物価の運動との関係(一)」（『経済学年報』第27集，昭和43年2月）8—24ページ参照。このことは、銀行券の流通を貨幣の流通とはまったく無縁なものでもあるかのように思いこんでいる人びとにとってひとつの反省材料となるだろう。

たとえば、「……銀行券が信用貨幣であるのは、信用制度が基礎になっているという意味である。……銀行券の場合には……銀行信用が前提されている……」（遊部久蔵『インフレーションの基礎理論』136ページ）、や「……貸付によって出、回収によって収縮するといういわゆる還流の法則をそれに特有の流通法則とする銀行券の信用貨幣としての本質……」（川合一郎『資本と信用』116ページ）、といったような、一面的な発想法にこりかたまっている人びとにとって。だが、信用貨幣としての銀行券（兌換銀行券）の本質は、じつは、「……銀行信用……」や「……還流の法則……」——それこそは、まさに、兌換銀行券のもうひとつの別の本質・擬制的利子つき資本としての形態規定にかかわるものだ——のなかにあるのではなく、読んで字のとおり信用的代用貨幣のなかにあるのだ、ということが、残念ながらそれらの人びとには正しく理解されていない。『現代銀行券の基礎理論』32-71ページ，346-364ページ参照。飯田繁「銀行券の二重規定にかんする論争点」（『経済学雑誌』第48巻第5号，昭和38年5月）参照。飯田繁「不換銀行券の二重規定と伸縮性〈序章〉」（『経済学年報』第19集，昭和39年2月）参照。

（未完）

1971年8月13日稿（統論とも）